

「フキノトウの観察(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

フキノトウ(蔕の臺)は、「フキ」(植物名)の花に相当する器官である。土の中から突然花だけが咲く、珍しい形態の植物と言える。



一つのフキノトウの根元を掘ってみた。地面下の比較的浅い場所に、横に延びる太く強靱な根のようなものがあつた。これは「根」ではなく「地下茎」である。この地下茎には毒があるので、注意が必要だ。その地下茎から「花芽」をたてて、それが開花したもの(または開花前のもの)がフキノトウと呼ばれる。



あまり知られていないが、フキは雌雄異株で、雄株には雄花、雌株には雌花しか咲かない。写真は雄花の先始めで、意外にも美しい。白く立ち上がっているのは「雌しべ」のように見えるが、これが「雄しべ」ということになる。雄しべなら当然花粉がついているはずなので、さっそく調べてみた。



(反射光・×100)

このような対象物の検鏡では、透過光よりも反射光のほうが良い。特に対象物の「真の色」を見たい場合は反射光が有効だ。雄しべの先端は独特の形状をしていて、その周囲に黄色い花粉がついていた。まだ「葯」は開ききっておらず、花粉の数は少ない。



(反射光・×400)

一番良いのは、「雄しべ(葯)」の縁に、浮くように見える花粉粒である。これを探するのは大変難しいが、ピンセットで雄しべを慎重に回転させると、必ず見つかる。アサガオの花粉のようにトゲがあり、これは虫媒花の花粉の特徴だ。しかし大きさは虫媒花としてはかなり小さい。モンシロチョウの卵にも似た黄色半透明で、なかなか美しい花粉だと思った。